

私の子育てと仕事～多くの人に支えられて～

Child Rearing and Work: My Career Supported by Many People around Me

高橋則子 Noriko TAKAHASHI

私が企業の研究所に勤務してから25年が経とうとしています。担当業務は分析、専門は赤外分光です。入社以来、社内の研究・開発・製造・販売を分析によりサポートしてきました。私の25年間の仕事と私事を四つの時期に分けて、振り返ってみました。

第1部：入社～結婚～出産：私が入社したのは男女雇用機会均等法の施行前年でした。大学卒業の際に指導教官から「君たちが道を開かなければ、日本の女性研究職は後が続かないんだよ」と言われたこと、採用面接で、「女性でもちゃんと仕事をさせてもらえますか？」と質問し苦笑されたことを今も鮮明に覚えています。入社してからは、女性だからと見限られることを恐れて、どんな仕事も平気な顔を装いながら必死で取り組みました。当時は企業でもFT-IRの活用が本格化し始める頃で、新しい分析に精力的に挑戦しました。今考えると、かなり肩肘張っていたように思います。入社4年後に結婚しました。主人は私の仕事にはとても理解があり、結婚は仕事に全く影響しませんでした。その3年後に、長女を出産、満一歳までの育児休職を取って職場復帰しました。復帰後は時間に追われながらも、子どもがいても働けることを証明したいと精一杯仕事にしがみつきました。長女妊娠から3年空けて次女を妊娠しました。その後、私の生活は一変しました。

第2部：主人の入院～死別～シングルマザー：次女を妊娠した直後に主人が入院し、1年の闘病生活の後、他界しました。そのため、次女の場合は、育児休職1ヶ月だけで職場復帰しました。幼い二人の娘を抱えて、身寄りのない土地での生活は、毎日が綱渡りでした。義父母も非常時には遠方より駆けつけてくれましたし、会社の同僚、近所の友達、保育園の先生…あらゆる人に助けってもらって、何とか毎日を切り抜けました。もう女性だからと気負う余裕もなく、私で役に立てることがあるなら何でもさせてもらおうと、できるかぎりの分析を手がけ、後輩の指導をしました。娘たちには、ただ食事だけに気を配って育てました。そして、自動車免許をもたない私は、どこへ行くにも二人

の娘を自転車に乗せて、抱いたり、おんぶしたりして育てました。そのスキンシップがその後の母娘の信頼関係を強くした気がします。

第3部：グループリーダーとして：長女が小2、次女保育園年長のとき、約10名の有機分析グループのリーダーに任命されました。メンバーをほぼ一新した若いグループでした。自分の生活だけで精一杯の私にグループ運営ができるのかと途方に暮れました。ところが、そのときのメンバーの団結力とサポートは素晴らしいものでした。メンバー全員が、グループのためにできることを探して自主的に取り組んでくれました。私の力不足をメンバーが立派に補ってくれました。良い面も悪い面も自分のすべてを曝しながら、できないことは人を頼り、その支援に感謝する毎日でした。その頃から、娘たちは姉妹二人だけで過ごす時間が増えました。そのことが姉妹の絆をととても強くしたように思えます。それから7年後、30名余りの分析センターの部長に任命されました。

第4部：部長として：130年近い歴史のある会社で初の女性部長となったとき、プレッシャーに押しつぶされそうになりました。悩んだ挙句に出た結論は、私らしさを失って私に何の武器があるのか、ほかに武器がないなら自分らしく思いっきりやるしかない、それで駄目なら降ろしてもらえばいいじゃない、でした。不安をよそに、メンバーは自然体でありのままの私を受け入れてくれています。そして、私事もやっと落ち着いてきました。

25年を振り返ると、女性であり、母親であることが仕事にも活かされ、仕事をし続けていることが子育てにも活かされたと感じます。今、間違いなく言えることは、微力であっても、社会に無限にある役割の中の一つでも担うことができれば、それは喜びであることです。そして、その親の喜びは子どもの喜びでもあるということです。親らしいことを何もしてやれずに育てた娘が言います。「私もお母さんのように、子どもを産んでも仕事を続けたい。だって、楽しそうだもん。」



高橋則子 Noriko TAKAHASHI

東洋紡績(株) 総合研究所 コーポレート研究所
分析センター
分析センター部長
大阪大学理学部高分子学科卒業
専門は赤外分光

E-mail: noriko_takahashi@toyobo.jp